【豊かな体験活動推進事業　推進校】

子ども農山漁村交流プロジェクトによる宿泊体験活動

山口県岩国市立川下小学校

学　校　の　概　要

①　学校規模

○　学級数：１８学級
（内特別支援学級　１学級）

○　児童数：４３９人

○　教職員数：２７人

○　活動の対象学年：５年生・６１人

②　体験活動の観点などからみた学校環境

○　岩国市の中央部に位置する。永年に渡る干拓事業により現在の地域になった歴史的経緯から、先祖伝来の土地に対する愛着心が強い。

○　錦川が分岐し、北側を今津川が流れ、東側は海に面している三角州の頂点付近にあたるこの地域は、自然環境に恵まれているが災害等の危険な要素も含んでいる。

○　伝統行事や地域の自然を大切にする風土があり、それに伴う行事に児童も積極的に参加している。地域のまとまりもよく、子ども会活動等も活発である。さらに基地のある街として、文化的にも国際色豊かで他地域には見られない独特の雰囲気がある。

③　連絡先

○　〒７４０－００２６
山口県岩国市車町１丁目１番地４３号

○　電　話：０８２７－２２－１５３３

○　ＦＡＸ：０８２７－２２－１５８０

○　ホームページ
http://www.kse.edu.city.iwakuni.yamaguchi.jp/

○　電子メール
Hot-n@mx71.tiki.ne.jp

体　験　活　動　の　概　要

①　活動のねらい

○　やましろ地域（美川、本郷、錦、美和）の自然に親しみ、中山間地域の環境とそこに息づく人々のくらしについての理解を深める。

○　共同生活をとおして、責任感や協調性を高めるとともに、お世話になる方々への感謝の気持ちを育てる。

②　活動内容と教育課程上の位置付け

（総時間数：４０単位時間・日数：４日間）

○　事前準備活動：９単位時間
（社会科２単位時間、総合的な学習の時間７単位時間）

○　自然体験活動：１５単位時間
（総合的な学習の時間１５単位時間）
活動場所：阿賀ふれあいセンター
旧長谷小学校
深谷峡温泉清流の郷

○　民泊体験活動：７単位時間
（総合的な学習の時間７単位時間）
活動場所：ＮＰＯ法人ほっとにしき選定の民泊受入家庭２０戸
（山口県岩国市錦町２０戸）

○　事後活動：９単位時間
（理科２単位時間、社会２単位時間
総合的な学習の時間５単位時間）

1　活動に関する学校の全体計画

(1)　活動のねらい

①　やましろ地域（美川、本郷、錦、美和）の自然に親しみ、中山間地域の環境とそこに息づく人々のくらしについての理解を深める。

②　共同生活を通して、責任感や協調性を高めるとともに、お世話になる方々への感謝の気持ちを育てる。

(2)　全体の指導計画（全４０単位時間）

①　活動の名称　　子ども農山漁村交流プロジェクトによる宿泊体験活動

②　実施学年　　第５学年　６１人（男子３５人・女子２６人）

③　活動内容及び期間・教育課程上の位置付け

【活動名称】　　〇内容	期間	教育課程上の位置付け
【事前準備活動】		
○　錦川の上流に位置するやましろ地域と下流に位置する川下地域のくらしを比較しながらの調べ学習	６月上旬	社会科２単位時間
○　体験活動の計画立案	６月上旬	総合的な学習の時間２単位時間
○　チャレンジ目標の設定	６月中旬	総合的な学習の時間２単位時間
○　ＮＰＯ法人ほっとにしきと民泊家庭への手紙（自己紹介）等作成	７月上旬	総合的な学習の時間３単位時間
【自然体験活動】		
○　河川プール ○　豆腐、こんにゃく作り ○　清掃活動 ○　スターウオッチング	７月２６日(火)	総合的な学習の時間６単位時間
○　巣箱作り ○　そば打ち ○　向峠神楽見学 ○　沢登り	７月２７日(水) ２８日(木)	総合的な学習の時間９単位時間
【民泊体験活動】		
○　錦町での農業体験・生活体験	７月２８日(木) ２９日(金)	総合的な学習の時間７単位時間
【事後活動】		
○　子ども農山漁村交流プロジェクトで学んだこと・成長したことの振り返り・表現活動	９月下旬	総合的な学習の時間４単位時間
○　体験発表（参観日）	１０月中旬	総合的な学習の時間１単位時間
○　錦川上流の石と下流の石	１１月上旬	理科２単位時間
○　環境を守るわたしたち	２月中旬	社会２単位時間

2　活動の実際

(1)　事前指導

７月下旬の夏季休業中に体験活動が決定し、６月上旬から事前指導を開始した。主な指導内容は、以下の４点である。

①　体験活動実施場所についての調べ学習

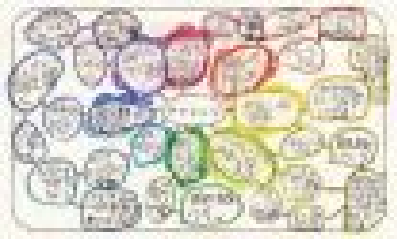
社会科の学習「山地のくらし」において、４年生の学習で使用した副読本「きょうど山口」等を活用して、中山間地域に位置するやましろ地域のくらしについて調べ学習を行った。錦川の上流のやましろ地域と下流の川下地区の環境と生活を比較した。

②　体験活動の計画立案

大まかな全体計画を児童に示し、活動に対する見通しをもたせた。個別に教育相談を実施し、個々の興味・関心や意欲、健康面、精神面での配慮事項を把握し、これをもとに班編成や民泊先を決定した。

③　チャレンジ目標の設定

国語科で学習したマインドマップをもとに今の自分をしっかり見つめさせ、チャレンジ目標を設定した。４日間の体験活動だけの目標ではなく、事前の学校生活や家庭生活でも常にチャレンジ目標を意識させた。



【マインドマップで目標設定】

④　お世話になる方への挨拶状作成

ＮＰＯ法人ほっとにしきや阿賀ふれあいセンター等の施設、民泊家庭に対して体験活動に対する意気込みや自己紹介の挨拶状を作成した。また、民泊家庭での主体的な取組やお礼の奉仕活動等についても、計画を立てさせた。

(2) 活動の展開

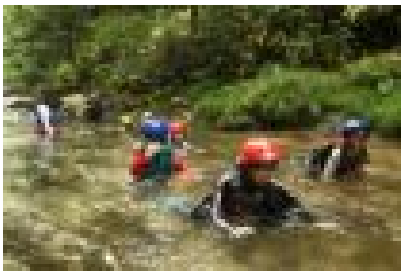
①　自然体験活動（平成２３年７月２６日（火）～２８日（木）

阿賀ふれあいセンター、旧長谷小学校、深谷峡温泉清流の郷）

阿賀ふれあいセンターと旧長谷小学校では、河川プールでの水遊びや花壇の清掃等をとおしてやましろ地域の自然に親しんだ。また、各利用施設で体験できるプログラム（そば打ち、巣箱作り等）を活用した。深谷峡温泉清流の郷付近の錦川の支流では、沢登りを体験した。

【そば打ち体験】
（阿賀ふれあいセンター）

【花壇の清掃】
（旧長谷小学校)



【沢登り】
（錦川の支流）

②　民泊体験活動（平成２３年７月２８日（木）・２９日（金）

ＮＰＯ法人ほっとにしき選定の民泊受入家庭２０戸）

ＮＰＯ法人ほっとにしきが選定した民泊受入家庭２０戸において、民泊体験活動を実施した。男女別２～４人程度の班に分かれ、それぞれの民泊先で企画・準備してくださった農業

体験や生活体験等を行った。農業体験や生活体験の主な内容は、野菜や切り花の収穫体験、収穫した野菜を使った夕食づくり、川魚釣り、虫捕り、洗濯体験である。民泊受入家庭それぞれが子どもたちのためにと様々な計画・準備をしてくださり、やましろ地域の豊かな自然を十分に味わうことができた。ＮＰＯ法人ほっとにしきとの事前協議の上、民泊中の活動についてはその民泊受入家庭に一任し、児童には事前に受入家庭の名前も活動内容も知らせなかった。この１泊２日の民泊体験が児童一人ひとりにとって感動的なものとなるよう、また主体的な取組を期待する願いから、担任は児童から離れて活動を見守った。

お客さまではなく民泊家庭の一員として子どもたちを迎えていただいたおかげで、１泊２日でも家族の温かさにふれることができ、民泊家庭だけでなく自分の家族に対しても感謝や家族の大切さを味わうよい体験となった。錦町駅では、お互いにいつまでも手を握ったまま離さず、涙、涙で感動的な別れとなった。

【民泊受入家庭との出会い】

【民泊先での体験活動】

【民泊家庭との別れの涙】

(3)　事後指導

体験活動終了後すぐの登校日を利用して、児童はお世話になった施設や民泊受入家庭に礼状を作成し、ＮＰＯ法人ほっとにしきを通じて送付した。２学期に入ってから、体験前と体験後の変容を見取るために児童と保護者それぞれにアンケートを実施した。１０月の参観日に体験発表の場を設定し、ＮＰＯ法人ほっとにしきの方と保護者に体験活動の成果を発表した。

子どもたちは、体験した内容やそれをとおして学んだこと、成長した自分について発表した。ＮＰＯ法人ほっとにしきの方からは、子どもたちの一生懸命な姿とチャレンジが今も継続していることへのすばらしさを褒めていただいた。また、多くの民泊家庭からの「やましろ地域を第２のふるさとだと思っていつでも遊びに来てほしい」という話も添えられた。

【子どもたちによる体験発表：チャレンジ　ｉｎ　やましろ】

3　体験活動の実施体制

(1)　学校や受入地域の支援体制

①　学校における支援体制

校長、教頭、教務主任、学級担任を中心に、体験活動の意義・体験内容・実践方法・教育課程上の位置付け・予算についての検討を行った。また、本活動にかかわる者だけでなく全

職員に内容を伝え、全校体制で支援できるよう共通理解を図った。体験で終わるのではなく、体験をとおして何を学ばせるのかということを重視しながら支援体制を整えた。

② 受入地域における支援体制

○ 自然体験活動・・・ＮＰＯ法人ほっとにしき

○ 民泊体験活動・・・ＮＰＯ法人ほっとにしき選定の民泊受入家庭

事前にＮＰＯ法人ほっとにしきの方と利用施設や場所を確認し、体験内容を吟味した。

(2) 配慮事項等

① 保護者への事前説明

児童が４年生の時の２月の学級懇談会で、本事業の関係者を招き、この体験活動の目的や内容、これまでに実施した学校の体験の紹介等を行い、保護者の理解と協力を求めた。

５年生になった４月の学級懇談会では、体験活動の目的と合わせてめざす児童像について説明を行い、６月の参観日には、マインドマップをもとに児童一人ひとりがチャレンジ目標を設定する学習場面の参観授業を計画した。参観後の学年懇談会では、必要経費、準備物等についての説明を行った。それ以降の連絡については、学年だよりを中心に連絡を行い保護者の負担と不安を軽減できるように努めた。

② 児童の健康調査

学級担任が健康調査票を作成し、体験活動１か月前に調査を実施した。健康状態や服薬とあわせてアレルギーの有無（食物・動物）を確認した。保護者があらかじめ民泊家庭に伝えておきたい事項については､ＮＰＯ法人ほっとにしきを通じて民泊受入家庭に連絡を行った。

③ 安全管理体制

７月２６日（火）～２８日（木）の体験活動では、校長、教頭、教務主任、学級担任が引率者として児童の健康及び活動中の安全管理に努めた。

２８日（木）午後～２９日（金）の民泊体験においては、ＮＰＯ法人ほっとにしきを緊急対応の窓口とし、民泊受入家庭で何か事案が発生した時にはＮＰＯ法人ほっとにしきを通じて学級担任に連絡が入る体制を整えた。学級担任は、ＮＰＯ法人ほっとにしきの代表者とともに民泊受入家庭を巡回し、民泊家庭への挨拶とともに児童の活動の様子と健康状態の確認を行った。ＮＰＯ法人ほっとにしきのホームページ上では、活動中の児童の様子がリアルタイムで伝えられた。この情報サービスを何度も活用したと保護者から聞いている。

４ 体験活動の評価の工夫と指導の改善

(1) 評価の工夫

① 児童には、全体のめあてとあわせて個々のチャレンジ目標を達成することができたかどうかについて自己評価させた。３泊４日の体験を振り返ることを通して、「今後も日常生活の中でチャレンジを続けたい」という児童が多かった。また、体験前は３泊４日という長い期間に不安を抱いていた児童が多かったが、「もう一度やましろ地域に体験活動に行きたい」「民泊体験をもっとしたかった」という児童が大半を占めた。

② 学級担任が作成したアンケートを実施し、児童と保護者に回答を依頼した。体験前後の児童の変容を数値化することにより、体験活動の評価を行った。アンケートとともに体験活動に対する感想（自由記述）も依頼し、多くの保護者から児童の成長の様子とこの体験活動に

対する感謝の言葉が寄せられた。

(2)　指導の改善

①　自然活動体験中の２日目までは、児童の就寝後に関係者が集まりその日の児童の様子を互いに報告し合い、よさと課題を明確にした。よさについては、児童自身にすぐ伝えることで一層の取組を促した。一方、課題についても翌日の活動の中で振り返ったり考えさせたりする機会を設け、児童自らが主体的に失敗体験を成功体験へ生かすことができるよう指導の改善を図った。

②　本事業で得られた成果をこの４日間の体験活動だけで終わらせることがないよう、今後も児童の学びの場を設定していきたいと考えている。現在は新たなチャレンジに取組中である。

5　活動の成果と課題

(1)　児童の変容

体験後のアンケートより、右記のような結果が得られた。

アンケート内容	児童（%）	保護者（%）
自分のことは自分でするようになった	７５	４４
自分のことは自分で言うようになった	６６	５１
ことばづかいに気をつけるようになった	６１	２６
あいさつを進んでするようになった	８６	５３
あいさつや発表などの声が大きくなった	５６	４２
はき物をそろえるようになった	６８	１９
食べ物の好ききらいをしないようになった	６８	４６
手伝いを進んでするようになった	６５	５７
友達の気持ちを考えて行動するようになった	８５	５７
友達のいいところに目が向くようになった	８０	５１
家族のよさを感じ、感謝の気持ちをもつようになった	９０	５５
ふるさとの良さを感じるようになった	９３	６１
自然の移り変わりに目が向くようになった	７８	６３

児童は、自己のチャレンジ目標を意識しながら主体的に本体験活動に取り組んだことがわかる。児童の感想「３泊４日も家族と離れて、家族がどんなに愛しいかわかった。だから、民泊はいい経験だ。別れの時涙が出たけど、なぜ涙が出たのか自分でわかる」からも成果が伝わってくる。

保護者からも、「自分のことは自分でやるようになり、必要なことは聞かなくても伝えてくれるようになったと感じる。楽しく活動する中で、グループのみんなが納得いくようお互いに配慮できたようだ。今から思春期を迎えいろいろな壁にぶつかったりした時などに、この体験活動の経験が大きく心の支えになるような気がする。すばらしい、貴重な体験をさせていただき感謝している」というような感想が多く寄せられ、本体験活動が大変有意義であったことがわかる。

(2)　今後の改善の取組

本体験活動では、学級別、学年全体、そして民泊という３泊４日の活動形態と流れが効果的だった。失敗した時にどうするかを自分で考えさせることができ、成功体験だけでなく失敗体験も大切な学びとなっている。農山漁村交流プロジェクトが終了してからも、児童は個々の課題をもち、チャレンジを継続している。互いによい個人、よい集団になろうと努めていることが日々の生活から伝わってくる。体験後に実施したアンケートを学年末にもう一度実施し、児童の変容を比較する予定である。教育活動全体を通して児童の学びに連続性をもたせるとともに、新たな成果と課題を追求していくことが、今後の取組の一つである。